

三河アララギ

平成三十一年 2019年

新年号

第六十六巻 第一号



ニューヨーク日記(147) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Champagne dreams and Caviar Wishes?

Blue Shoe Diaries



贅沢な!って感じでしょ?確かにそうなんだけど何ヶ月か前にネットで超お得なセールで「キャビアの試食&お店案内」みたいなもの買ってたの。本当に一口なんだろうな〜と思いながらも。スケジュールの都合が悪くそのクーポンも期限切れで私は諦めちゃっていたんだけどお店のそばを通った時にShoeLadyが「ちょっとまだ使えるか聞いてみよう!」っと。ダメもとで入ったら何と「OK」!っでもっとビックリしたのが写真に写ってるもの全てプラスウォッカのショット2個それから色々なキャビアを載せるトーストが出てきました。美味しかったよ〜!

It looks pretty luxurious, right? And that rose bubbly was a half bottle of Ruinart. So months ago, I got this deal at a flash sale site and paid what I thought would just give us a one bite sampling of caviar. With life getting in the way, we had actually let this coupon expire and I had given up on it. But today, when we passed by the store, ShoeLady decided to go and ask if they would still honor the coupon. And they did! So all this, shown in the photo, came and more! (selection of toasts and condiments, and 2 shots of premium vodka) Needless to say, we left happily satisfied.

目次

第六十六卷第一号(通卷七八一号)

表紙・新年	今泉 由利 (1)	水野 絹子 (22)
ニューヨーク日記(147)	Blue Shoe (2)	牧原 規恵 (23)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	稲吉 友江 (23)
三河アララギ歌集VI	大須賀寿恵 (5)	鈴木美耶子 (23)
歌集「續草々」	今泉 米子 (6)	吉見 幸子 (23)
三河アララギ歌集VI	河原 静誠 (7)	牧原 正枝 (23)
十六夜の月	岡本八千代 (8)	現代学生百人一首
明治節	弓谷 久子 (10)	東洋大学
擬い	今泉 由利 (12)	相川 雅典 (24)
百舌の声	安藤 和代 (13)	岡部 はな (24)
親芋子芋孫芋	清澤 範子 (14)	平石 健太 (24)
変わりゆく街	伊藤 忠男 (15)	小野塚琴弓 (24)
梅の返り咲き	白井 信昭 (16)	二宮由美花 (25)
酉の市	森岡 陽子 (17)	原田 理帆 (25)
読書三昧	杉浦恵美子 (18)	栗野夏乃子 (25)
ホトトギス	山口千恵子 (19)	渡部 七海 (25)
瑠璃色	阿部 淑子 (20)	森岡 陽子 (26)
亥歳に思ふこと	夏目 勝弘 (21)	高橋 育郎 (28)
『いとよせ』	石田 文子 (22)	柳田 皓一 (30)
	森 厚子 (22)	山迫 京子 (30)
	山崎 俊子 (22)	山元 正規 (30)
	三田美奈子 (22)	森岡 陽子 (31)
		松本 周二 (31)
		重野 善恵 (31)
		『俳句』
		輝春 大多喜城
		贈呈誌
		『歴代天皇御製歌』(九十六)
		『貫名海屋資料館』(50)
		御津磯夫短歌鑑賞
		鮫島 満 (56)
		『氷魚』のことから(216)
		岡本八千代 (57)
		編集室だより(二〇一八年十一月)
		野菜・まんだら(11)
		今泉 由利 (58)
		『三河アララギ』について
		(60)
		今泉 由利 (32)
		田中 清秀 (32)
		植村 公女 (32)
		今泉 如雲 (33)
		杉浦 弘 (33)
		田中 清秀 (34)
		丸山酔宵子 (36)
		江上 浩二 (38)
		山本紀久雄 (40)
		今泉 雅勝 (42)
		平井 茂行 (44)
		中屋 保之 (46)
		本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
		本田 勇氣 (48)

黄素馨の門（昭和四十一年〜昭和四十四年） 御 津 磯 夫

三河より還りたまひていくばくもなかりしことをしみて今思ふ

みささぎの丘につづける北のなだりたつ孟宗の秋のかほりを

いくきだに耕しのほりみのりあり細き稲田も大和の柿も

しげりあふひとつの丘をみささぎと秋のまひるをこもる鳥が哭^ね

みささぎとしげれる昏らき奥がにて何の木の實のおつるおとする

大海人^{おおあま}にしたがひとげてこの丘にとはにむつまじ小さけれども

杉も檜もひいづるなくみ垣内秋の日ごもりさわがしからず

檜隈のやさしき丘にともなへり女醫のわが子はまだ人を診ず

おもひ来し秋草もなく埃たつる人にまじりて石舞臺あり

あらはなる岩にかげあり天わたる秋十月の日は正午なり

三河アララギ歌集VI

大須賀寿恵

敷きのべたる蒲団に入りぬけふもまたわが手に漸く干しし蒲団に

黄葉してまるまりながら落ち続きリラはけさより冬木となりぬ

浄願寺墓地をよぎれる径細しわが為に月の照るがごとしも

起き出でて雨かと見上ぐる東の空に眉月鋭く光りてをりぬ

おのづから泪あふれてゐたりけり刺すごとく痛むわが足腰に

手の震へ止まねばしばし熱き湯に耐へて両手を浸してをりぬ

飲み終へてぬくみ残れる萩焼茶碗両掌につつむこのしばらくを

名残とはかくの如きかいま飲みし抹茶茶碗のぬくみ冷えゆく

起き出でて歩きはじめのわが体右に左にけふもゆらゆら

はたはたと音してストーブの火のつきゆくを瞬きしまたたつつ吾は見てをり

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

たまさかに出でて歩めり春菊の冬のみどりのさわさわの畝

梢には房花らしき見えながら冬に入りゆく庭の白樺

をりをりに見上ぐる棟あふちの冬の枝果みのなくなりて小鳥らも来ず

アンデスの毛ものの毛皮のスリッパにたちまち馴れて履きづづける

裏白の反故紙綴りて毛筆しるに記しつづくる薬室日誌

味噌汁に朝々入れし二切れの南瓜終りて冬至となりぬ

境内の松の下かげまだ降らず松毬拾ふ世田谷の児こは

まだ稚き右近の橘の橘の香具の木の實のやさしき黄のいろ

ドラセナの葉のさやさやにゆるる窓ガラスを拭きて子ら帰りたり

初雪を放ちし白雲かがやきて柗の秀を翔び走りゆく

三河アララギ歌集VI

河原静誠

紫陽花の花の色日毎に変わるらし煩惱具足と独りつぶやく

ケロリ風一つ唸れる御津の空浄願寺の上の夕焼けの空

柔らかく齒にしみとほるベッコウの大根の味は故郷の味

白き糸やうやく通して繕ひぬ日毎履きたる白足袋の底を

山門に近く洗耳の泉あり吾も人の子たらちねを恋ふ

鉢を持つも経巻を持つも笑み給ふ十六羅漢の前に吾が立つ

ノビタキの二羽飛び交へる墓原に吾は独りにて花殻を燃す

わが庭にとび来る小鳥多くして図鑑あそびに一日くれたり

窓に視る五色の雲に掌を合はす眼内レンズを入るる日の窓に

ことさらに太く鋭く感じたり麻酔の針は吾の瞳に

十六夜いざよひの月

蒲郡 岡本八千代

今宵い出でし十六夜の月仰うぎたり何とはなしにかなしくなり来

十六夜の月光かげに映かつる影法師オカッパ頭おとめの乙女おとめのわが影

何故にそんなに明るく照らすのか冬の十六夜の今宵の月よ

あるがままに一日ひとの暮れてあるがまま夜更けて独り本読よむわれかな

おほらかに明るき笑顔の老ゆらくになりたしと思ふこの夜にして

何故にあんなににこにこしてゐるのかさういう人に今はなりたし

新しき眼鏡めがねに替えて嬉こしかり此度こたびは地味な肌色のふち

佛前に古きと新しき眼鏡供へなんとなくお礼の南無阿弥陀佛

新聞も本も同じくその文字のくつきりとして心にまで届く

門燈を灯して白きその明^{あか}かりわが新しきめがねに透る

はや昼かパンと少しのスープあれば心も足らへるわが昼餉かな

また今日も夕暮を告げる鐘が鳴る外の井戸水に大根洗ひつつ

かげりゆく夕日の中にわれ独り佇ずみておもふ天空の君を

添ひとげて君とわれとの六十余年何と速きか月日の流れよ

朝日^{あした}こそ朝寝坊せむとおもひゐしに明日は八時までの生塵^{なまぢり}捨てたる日

明治節

豊川 弓谷 久子

小学校の運動会と決まりぬし明治節なり今日文化の日

リレー競走に声を枯らして応援のどよめき今も耳に残れり

得意種目無けれど心浮き立ちし運動会は村中総出

もう少し先にと伸ばす冬仕度立冬なれど日差しあたたか

挿芽より育てし小菊とりどりの花咲き初めて庭をにぎはす

大切に夏中育てし菊の花夫の墓への供華にと剪りぬ

憧れし日もありたりき与謝野晶子今日は生誕百五十年

あの時代に「君死に給ふ事なかれ」とうたいし人に心打たれき

短か日の今日の一日は何為さむ午前六時はまだ夜明け前

世情の事はひとまず置きて穏やかな一日なりしを先づよしとせむ

書きとむる程の事無き一日は幸せなりしと日記を閉じる

小春日を子はチューリップの球根植うる花咲く春を楽しみ待たむ

道端に立ちてのぞき込む御津川に黒ぐろ大鯉群れ泳ぐ

五十糶以上はあるねと子と話し合ふ秋の日あまねし今日の御津川

流感予防の注射と定期検診を済ませて乗り込むみさとの車

擬もどかし
い

東京 今泉 由利

ニューヨーク・ラスベガス・ロスアンゼルスいま原宿・あすはジャマイカ
今日の日の過ぎゆかむとす時刻にて自分自身に残りしは何

思ひ出となりたることの思ひ出にもふ戻れないこの擬もどかしさ

高層のビルにゐたりてはるかなる私の視界東西南北

真地球の出来し日のこと偲びゐるほんのりほのか三百六十度

坪庭に一本立つるヤマモモノキに群雀こしピチピチピチピチ

地球より贈り物かと目覚めゆく群雀のピチピチピチピチ

コーヒーの木 of 育て方を検索すこのごろ寒くなりたることよ

大き鉢動かさむとす日溜まりへ日光が好きとコーヒーの木

アカネ科のマダカスカル原産コーヒーの木白き小花を待ち待ちてゐる

百舌の声

豊川 安藤 和代

明日もよき日であらん入りつ陽が弓張山脈ほんのりと染む

百舌の声高く聞こゆる朝の窓何か佳きことあるやも知れぬ

待つ人も便りもこずに日の暮れてはぐれカラスか北へ去りゆく

孫のメール「風邪ひかないで」と絵文字入り胸あつくして胸に抱きしむ

上野坂の歌を詠みいし友の逝き今上野坂は野菊咲きおり

友くれしハゼをフライとからあげと卓には海の秋がはじける

三日月をとってほしいと泣いた孫教師となりて四年目の春

友の様な味にはならねど漬け物を友を思いて塩をふりゆく

しわ深き手より受けとる朝市のリングに笑顔も添えていたゞく

食べてるか寝てるか勉強しているか下宿の孫にけふもメールす

親芋子芋孫芋

春日井 清澤 範子

足腰の重き日々なりこの頃は吾の最善まだまだ頑張る

一日中雨となりたりサワサワと庭の椿に雨は降るなり

故郷の足助紅葉の香嵐溪ライトアップの写真十一月一日

腰かがめ夫の作りし里いもは親芋子芋孫芋と付きぬ

里芋を一株掘りて水洗ひみりん効かして煮上げし美味し

木犀の匂ひ始めて七日なり昨夜の雨に花散り積る

散りしきる木犀の黄色掃き寄する帰る娘に車庫開けて待つ

幹太く枝の繁れる貝塚伊吹庭師頼みて剪定をする

愛らしく白き花咲く柊ひいらぎの広ひろがる枝切る柵越えし枝を

今朝も掃く吾が家の庭の木犀に隣家の赤き柿の葉もあり

変わりゆく街

大阪 伊藤 忠男

鳥取に高松高知駆け抜けるあつという間にこの月が過ぎ

上棚田清水湧き出る宝島実り忘れて過ぎる年月

精錬のガスに山肌削られし赤く爛れた瀬戸内の島

そこかしこ現代アート見る度に隠れた恥部を憂ふ島人

窓からの潮の香りに地平線白くなりゆくまどろみの中

北風に耐えて冬越す梨の木の咲く花白く砂浜埋める

その昔クレーン林立壮観もここは玉野か造船の町

山々にこだます鳴き声獣道おそる恐ると藪を分け入る

垂直に迫る岩肌鬼気迫る冷たき風に頬は強張る

煙り立つ杉山妖し智頭の宿呪い渦巻く伝説の村

梅の返り咲き

豊川 白井 信昭

生け垣のアラギツツジ剪定の枝に護^{まも}られ潮風しのげり

幾度も台風に揉まれ隣畑梅の木末^{こぬれ}に返り咲く花

御津屋敷磯夫記念館今頃は庭の芭蕉楓いかなびかむ

記念館広い屋敷の表通り高野槇ひとつ青くすぐたつ

医院築八十九年の記念館椰木ひとついかにやあらむ

浜近く伊勢湾台風高潮の今に伝える潮位標識

目を見張る被災水位表示板はわが背丈はるかに超える約三・五メートル

あちこちの道にいつしか表示あり津波到達想定矢印

平らかに交差路角に位置をしめ新しく建つ消防施設

完成の期待高まる新施設側溝工事のいよいよ始まる

酉の市

東京 森岡陽子

冬の朝買い物途中の広場にはぽつんとベンチ銀杏の葉降る

聞きなれぬ鳥のさへづり心地良く朝の目覚めは山形の宿

ブードルの私が産婆で育ての親養子に出た犬十一才に成る

日曜の電車の客のまちまちは喪服着る人晴れ着きる人

ババ友は小春日和のがさぬと布団を干すは昭和の名残

山伏の法螺貝の音鳴り渡る体内に響く境内に響く

曇天に景気占う酉の市熊手を掲ぐ得意気な親父

酉の市浅草向う一の酉地元の目黒向うは二の酉

すぐ側も空家になるは突然に柿の実くれたあの人何処へ

冬初め愛犬眠る寺へ行く暑さに敗けし御盆に行けず

読書三昧

蒲郡 杉浦恵美子

起きてよい頃迄寢床の読書なり退職後にはこんな贅沢

父母も夫もこんな贅沢知るまいぞ独り暮しの読書三昧

心あてにとふと口を衝く我が庭に咲き乱れたる白菊の花

どの人もお迎えが来て去り行けり我はぼつんとタクシーを待つ

こんなにもきらきらしてる空の青手術了りし左眼世界

世の中がきらきらしてる新品の我が左眼のレンズ通せば

手術後の我が視界にてもものすべて存在感を示して居りぬ

シェリー酒が我ら夫婦のブームなる刻あり共に健やかなりき

三年間寝かせた生ハムその堅さ噛むほど時が融け出して来る

キタキツネ何処より来て何処へと立ち去りて行く日暮れの山道

ホトトギス

豊川 山口千恵子

わが飼えるメダカはすべて死に絶えてホテイアオイのみ大株となる
夏掛けの薄き布団を洗ひつつこの夏の酷暑はや忘れつつ

ホトトギスの花鮮やかに見えしかな白内障の手術せしとき

ホトトギス咲き乱れつつ美しき暦はすでに立冬となる

思ひ惑ふ今日のことは今日のこと明日は明日のこと考えやう

「ぐりとぐら」読み聞かせしはいつのこと一人読みある昔思ひつつ

なりてゐし花梨すべて地に落つる拾ひし黄色良き香りす

洗剤の残り香ほのかにするシート香りの中に眠気のきざす

読みてゐる本のページに小さき羽虫こんな小さき命もあるよ

柊の小さき白花散りしけり散りて知りたり花咲きしこと

瑠璃色

横浜 阿部 淑子

新春に人類の幸祈り込め瑠璃色の地球守り行きたし

初春を^{はっはる}寿ぎ揃う子や孫と祝膳囲みて華やかな^{えみ}笑顔

新らしき年を迎えて夫の脚前へ前へと歩幅^{あしはた}広げて

若人の描く夢夢拡大し成果の発表聞きては涙

迎春の嬉しき幸に感謝してプラス思考で輝く日々を

亥歳に思ふこと

豊川 夏目 勝弘

冬の雨しずかに降りをり傘ささず^{さんじゆ}傘^{さん}になりしと思ひつつ行く

傘寿をば祝はなくとも変りなし今をひたすら生きてゆくのみ

繁り立つモチの大樹の高きに居り笹鳴くウグイスを下に聞きつつ

冬鳥となりて里の藪なかに春を待ちつつ笹鳴くウグイス

春一番にウグイスの鳴き声を聞きしは二月二十八日なりき

亥というは草の根のこと何故に猪なのかと思ひしことあり

十二年に一度の芽出度き歳なるも追はれ追はれるイノシシあわ憫れ

イノシシの土偶を作り祈りしや一万年余を共存をして

イノシシがちまた巷に出でくればニュースになるニュースとはいったい何

食べ物が有る所へはイノシシも人間も集まるは自然の理ことわり

人間はイノシシを食べるがイノシシは人間を食べることなし

イノシシの生命いのちも我が生命も神の創つくりし生命なりけり

『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

石段の一つ一つもままならず気合ひを入れて声出し上る

満月のすぎて日に日に秋深し路地に吹く風ひんやりとして

石田 文子

茜雲はれて矢作の川の辺にあかき入り日のいま落ちんとす

吾が家にて笛の音ひびくチャラボコよ太鼓の音は隣家の主人

森 厚子

姉ちゃんと僕の夢はね「宇宙兄弟」と孫の得意顔今宵十三夜

海中のいくつもの杭に鳥とまる夕陽に向かふ我も同じか

山崎 俊子

台風に倒されしコスモス白は枯れ返り咲きしはうすきくれなゐ

夫と行きて永源寺のもみぢ愛でしこと落葉掃くけさ思ひ出しつつ

三田 美奈子

二十年来今年は越せずと言ひ続けし母の卒寿を祝ふ今日かな
嵐の日迎へしラテよ保護犬の怯えもいつしか和みてゆくらし

水野 絹子

もう少し切りのつくまで止められぬつるべ落としの畑のわれは
整然ととは言えぬわが畑は色とりどりの菊の乱れ咲きたり

牧原規恵

徒競走にビリになりたるわが孫よ頬に伝はる大粒の涙
使ひより夕焼の道を帰り来て一つ剥きますあきばえ秋映りんご

稲吉友江

透き通るうす紅色の紫蘇ジュース手製と言ひつつ友がくれたり
いく度の嵐に晒され銀杏並木秋のただ中早もあらはに

鈴木美耶子

一輪の桔梗主役に今生けて京友禅のその名気高し
塩害の葉の枯れ落つるわが庭に金木犀の香りただよふ

吉見幸子

畑の横つぎつぎ通る中学生遠足ではなさそうな足音よ
早足の中学生に聞きたれば「七時出発のマラソンハイイクです。」

牧原正枝

現代学生百人一首

東洋大学

甲子園高校球児の戦いに怪物が生む新記録あり

東京都立府中工業高等学校三年

相^{あい}川^{かわ}雅^{まさ}典^{のり}

祖父からの便りふと読み疲れとれ文字で伝わる優しさふわり

学習院女子高等科一年（東京都）

岡部はな

下駄箱にラブレターがね入ってた顔面真っ赤プチトマトだね

京華商業高等学校三年（東京都）

平^{ひら}石^{いし}健^{けん}太^た

「意地っぱり」母が笑ってそう言った私も笑う「親ゆずりだよ」

貞静学園高等学校一年（東京都）

小^お野^の塚^{づか}琴^{こと}弓^み

石川でひとはたらく父の家部屋にあふれる家族の写真

東京学芸大学附属高等学校一年 二宮由美花

マウンドで輝く彼は同級生「あと一球」と拳を握る

東京学芸大学附属高等学校一年 原田理帆

機械化で消えてなくなる仕事知り将来の夢決められずいる

東京農業大学第一高等学校一年 栗野夏乃子

めのまえのバーをこすぞと踏み切った私の視界一面青空

横浜市平戸中学二年（神奈川県） 渡部七海

贈呈誌

森岡陽子

鹿兒島アララギ 11月号

- 大根を間引きてやれば葉を広くこの素直さが吾を励ます
郡山繁幸
- 天狗池に映る檜ヶ岳をながめつつ岩に座りて雲去るを待つ
江藤金博
- いつになく雀群がる吾が庭は紫蘇の実あまた肥りてゐたり
市来栞

秋楡 第一〇一号

- オレンジの実る島影うつすらと光の海にゆらるることし
三原香代
- 羽広げ唄い競った鈴虫よせめて草むらへ早く返そう
中村かずえ
- いにしえの茶人ゆかりの道具にて席を掛けたり我が手に余る
不破明子

終 十一月号

○原子雲に似し紅き雲部^へ子山^この上空占めて不気味に暮るる

山田 範子

○生命に危機のある大気不安定人の及ばぬ力動くか

服部 忠夫

○かたわれの舞台にひびく萬斎の心地よき声低くとおれり

佐々木 邦子

○白峰の飯屋に熊の刺身有りとすすけし張り紙風に揺れる

石田 敏子

冬雷 12月

○ヒメシバの花の小穂で傘つくり独り遊びし昭和偲ばる

永田 夫佐

○青き空透かせて見する薄雲の流れは速し台風ゆきぬ

穂積 千代

○洗車してほこり目立たぬフロントに猫が泥足跡をつけたり

○枯芒ひと花ふた花棲まはせて紅を帯びたる根元を守る

小久保 美津子

○草木の静寂のなか虫の声蟬の命を引き継ぎて鳴く

立谷 正男

輝春 大多喜城

高橋育郎 作詞

1 夷隅の山は 浅みどり

朝日に映える 天守閣

光まばゆき 金の鯨

要害堅固な この砦

輝春大多喜城 この勇姿 この勇姿

2 戦国武将に ならびなき

英傑 本多忠勝が

3

栗又の瀧に いやまして

築きし城は 木隠れの

愛惜尽きぬ 夢の跡 夢の跡

想いは遙か メキシコへ

太平洋に 友情の

虹の架け橋 渡したる

御宿砂丘の 石碑に

誉れは永遠に 刻まれん 刻まれん

『俳句』

總持寺の伽藍の影の花八手

柳田 皓一

立冬や平成の鐘響きけり

仏旗ふる園児の銀杏落葉かな

大震災の祈りの鐘や冬ぬくし

山 迫 京子

平成の観音像や花八手

總持寺に社もありて神の留守

三門の屋根の緑青冬めけり

山 元 正規

大祖堂の屋根を湿らす初時雨

雲水と東司に隣る神の留守

冬の雨法螺貝の音聞え来る

森岡陽子

静肅な氣の流れる冬の朝

三分ほど彩り残る落葉かな

大富士も御嶽も見ゆる草紅葉

松本周二

みそ汁のうまき勤労感謝の日

落葉のせビルの谷ゆく目黒川

味も良し紅葉また良しブルーベリー

重野善恵

虫喰ひの穴も押し葉に柿落葉

祖母がゐておでんつつきし日の遙か

鈴の音の余韻残せり神は留守

今泉由利

印度より中国を経る冬の寺

千年をおもんばかりぬ冬の寺

冬めくや白足袋走る長廊下

田中清秀

小虫舞ふ瓢箪池の枯蓮

こんにゃくと炊き大根のひとり酒

中吉のみくじ結びて一の酉

植村公女

書き順はどうでもよろし蔦紅葉

水切りの石選びをり秋麗

大北風やたまにはずる休みもよし

今泉如雲

羽前羽後津輕松前雪しまく

沼宮内ぬまぐない過ぎれば雪となりにつけり

万両に物相飯の春の雪

杉浦弘

誰もまだ踏まず掃きよき春の雪

灯籠の宝珠の上の春の雪

涅槃岳より釈迦ヶ岳春の風

地藏坐すいぬのふぐりの花むしろ

まつさらの富士近々と風光る

かさね吟行会

「鶴見の總持寺」 十一月

田中清秀

石原裕次郎は裕ちゃんの名で多くの国民に親しまれている歌手であり俳優である。兄の石原慎太郎原作の太陽の季節で初デビュー、その後多くの主演映画で連続ヒットして昭和を代表する日本最高のスターとなった。その墓碑には妻石原まさ子直筆の言葉「・心の夢覚めることなく」が掲げられている。平成三十年十一月九日、寒さが徐々に身にしみだした曇天の下、今月のかさね吟行会は裕ちゃんの眠る鶴見の總持寺を散策した。

曹洞宗大本山總持寺は十五万坪の広大な寺域を有し、三門から向唐門、中雀門その先の佛殿、大祖堂と多くの伽藍が建てられている。その大きさと格式ある建物には圧倒される。

千社札剥げし三門寒鴉

素山

總持寺の伽藍の影の花八手

浩一

名優の墓に絶えぬ供花や冬ぬくし

しのぶ

禅宗は大きく臨済宗と曹洞宗の二大宗派があり、共通

しているのは坐禅で悟りを開くことと師から弟子へと教えを伝えることを重視している点といわれている。曹洞宗の開祖は道元で鎌倉時代の人、いたずらに見性を追い求めず坐禅している姿そのものが仏であり、修行の中に悟りがあるという修証一等・只管打坐の禅を伝えた。曹洞宗では道元禅師を高祖と呼び崇めている。

太祖堂は歴代の祖師を祀り、千畳敷きの堂内では朝課・晚課の諷経を始め数々の儀式を執り行っている。また、佛殿は入母屋二重屋根の総檨作りで、床は中国風の石畳、七堂伽藍の中心の建物であり釈迦如来像が祀られている。

そして最も有名な百間廊下は長さ百六十四米、東西の殿堂群をつなぎ、外苑と内苑を分ける廊下である。床がいつも光り輝いているは毎朝行われる雲水の勤行のためである。両手について雑巾を使い、腰を上げて一氣に拭き抜ける、素人ではとても真似のできない職人技である。

冬の雨法螺貝の音聞こえ来る

陽子

雲水と東司に隣る神の留守

正規

半下視の眼に見ゆる帰り花

由利

「仏旗」は仏教を象徴する旗で法要等の行事の時に三

門や本堂の入り口に掲げて用いる。旗の色は青、黄、赤、白、橙に五色の縞模様を加えた六色である。吟行の当日には多くの幼児が、仏旗の小旗を振りながら、大祖堂で開かれていた世界仏教徒会議に世界各地から集まった宗教家達を笑顔で迎えていた。

また、禅宗では坐禅を組むだけでなく、読経や食事、掃除、作業を行う生活すべてが修行である。そして、応量器という食事の鉢から生飯を七粒残し、それを野禽など生有るものに施す出生（すいさん）も行う。日常生活を規則正しく行い、心身を鍛えることに主眼をおくのが禅の修行である、なんとも厳しく奥深いものである。

仏旗てふ小旗振る子ら花八手

出生に群るる山鳩冬日さす

大震災の祈りの鐘や冬ぬくし

さち子

清秀

京子

今年は天候不順が続き、猛暑や大型の台風に豪雨、さらには地震の発生と不安な日々が続いた。この異常気象が地球温暖化の影響なのかは分からないが不安になる。さらに太陽の磁場の変化で周期が乱れているという説もあり、益々心配になる。それでも立冬を過ぎるとやはり冬本番、朝夕はすっかり冷え込んできた。冬の季語は冬ざれや冬めく、冬日など季節の移り変わりを表すものか

ら、暖かい日の冬ぬくし、小春日和など豊富である。良い季語を上手に使得って俳句を捻って、世上の不安を忘れたいものである。

吟行の後の句会はいつものように囁目三句出し四句選で行われ、各々工夫を凝らした俳句が出そろい盛会の内に終了した。今回もカラオケ店を利用したが、やはりこのままでは帰れない。お墓をお参りしたご縁から、裕ちゃんを何曲か歌うこととなった。自慢の喉を披露して楽しい句会はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 二〇一九年一月十一日（金）

場所 神田明神・ニコライ堂

集合 JR御茶ノ水駅 聖橋改札口

十一時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（八一）

丸山 酔宵子

『今どきの京都の秋の宵模様』

「そうだ！京都に行こう！」ではないが、秋も深まった10月末、思い立って京都へ。

来日外国人が3000万人を超え、ジャパン・クール！はますます勢いを増している。世界遺産の清水寺、八坂神社や花見小路は勿論、紅葉し始めた嵐山の渡月橋周辺には、平日とは言え外人客だらけ。先月の台風による桂川の氾濫で渡月橋が破壊され、片側通行の為、歩行者で大渋滞である。

天龍寺への参道には、着物姿のヨーロッパ系、アジア系、南米系の外国人女性やカップルが違和感なく自然に闊歩している。一昔前のように、安物の派手な着物を着させて、ツンツルテンで「いっちょ上がり。まー綺麗！」でお金を取るのではなく、需要も多く競争も激しくなっ

たせいか、着物の質も着付けも様（さま）になってきたようだ。女性の髪形も着物に合うようにアップにしたり、男性の帯の位置もお腹に手ぬぐいでも入れているのか、低めに落としている。

嵐山の夜は早く寒い。一路四条烏丸、今宵のメインイベント、友人の紹介である「割烹たいら」へ。仏光寺通柳馬場西、四条より堺町通を南に下ると古い町家飲食が並んでいる一角にある。格子戸のある落ちついた佇まいで、白い暖簾が印象的である。ここまでくれば、外国人の姿は全くない。

店主の平智明（たいらともあき）さんは熊本生まれでミシュラン3ツ星で三島由紀夫や白洲次郎が愛した祇園の名店「千花」で21年修行を積みこの店を2012年にオープンした。

格子戸を開け店内に入ると未だお客は誰もいない。奥行きのある白木カウンターが8席ほどで「こじんまり」としながらも町家ならではの天井高と坪庭を臨め広々と開放感がある。

「ようこそ。お待ちしております。」「今日は、丹波の最後の松茸が入りました。それとこれも最後のいい鰯（はも）が市場であつたのでお出しします」。鰯にはアルザスの白を合わせてください。」ワインにも造詣が深く、休日にはフランス料理の老舗である日比谷の「アピシウス」まで京都から足を運んでくるのだそうだ。

高校卒業と同時に料理人を目指して「千花」に弟子入りし、それは厳しく鍛えられた40歳過ぎの機知と自信に満ちた凛々しい姿に、3時間のフルコースを堪能したのであります。

格子戸を開ければ町屋秋の宵

酔宵子

「江上浩二の独り言」 13 江上浩二

知財・グローバルとインターナショナル

2010年4月下旬のある学会での公開議論。理学部はサイエンスで、工学部が技術、テクノロジーだという。

さらに話が進んで、理学は人類共通の現象の解明などで世界の全ての人間に貢献すべきものだから、グローバルなものだと説く。技術は企業のビジネス・事業を拡大し、利潤を追求し、他国と競争するので、国境の存在を認めるインターナショナルなものだと説く。

確かに、一国に縛られ、企業が法人としてその縛られた国へ納税することを考えると、さも有りなんと肯きそうになるか、素直には納得出来なかった。

その学会の議論は主に大学の先生方であって、企業人も参加はしていたが、声が大きいのは大学側、司会者も大学側、企業側は比較的若い方で、司会者に振られないと弁が進まない。

サイエンスとテクノロジーの議論と、グローバルとインターナショナルの議論を同一の舞台ですることは、ちよつと飛躍し過ぎて思うように思う。英語の言葉としての global と international について辞書で意味を調べる程度の事では簡単に解決できるものとは思えない。global は球体の地球全般に関わること、international は2国間または複数の国家が関与することと辞書は言及しているだけに過ぎない。

私個人的には、international を日本語の国際という語句に惑わされ、拡大解釈していたような気がする。日本人は日本が島国なので、国際を海外と同一解釈をしてしまい、海外は地球上の島国である日本を除いた「全ての他国を包含する」として受け入れて来たような気がする。さすると、我々日本人には、「グローバル」と海外と国際という3つの語句をクールに使い分けないと「全地球の人」に登りつめられないのかもしれない。

サイエンスに絡む知的財産権（知財）の話をする、特許申請前に公知事例としての何らかの証を残しておく、それでわざわざ特許出願をする。そうすると、公知

事例があるので、拒否される証が残る。それで、正式に類似案件を誰かが特許申請しても、公知事例があると理由で、全てが拒否される。こうやって、サイエンスが人類全ての共有財産だという意識形成がされればいいのだが、それも、簡単には世論形成や法整備も進まないであろう。

技術、テクノロジーに絡む知財は、現行通りの自国・海外国への出願申請、国際特許などの知財認識そのまま受け入れる他にはないと私の意見は留めておく。

（追記）2010年のノーベル賞受賞の根岸氏は、受賞者発表会場のストックホルムからの電話インタビューで、クロスカップリングについては特許を取得しなかったと明かした。根岸氏は「特許を取得しなければ、我々の成果を誰でも気軽に使えるからと考え、半ば意識的にした」と述べている。

（追記）平成23年9月10日に米国特許先願制移行に関するオバマ大統領声明について、マイブログに記す。

〈米国、先願性特許制度へ〉

米国議会は半導体トランジスタラジオ世代以来の、米国の特許制度の見直し改訂文書にオバマ大統領の署名を求める為に提出した。概要は以下の通りである。

主眼は米国内で雇用を確保し、米国の製造業が米国内に留まることを切に求めることである。1836年以來の米国特許制度の画期的改革であり、世界の多くの先進工業国が基本にしている先願制度に、これまで米国が固執していた先発明制度から変更したこと。この新法制化はこれまでの長い特許侵害係争を減らすことや質の高い特許を維持するために、権利化の審査プロセスで、役に立つ第3者の情報提供も可能にする条項も含まれている。制度の改革に伴い、先願制での迅速出願システムへの支援なども含まれている。

*長い特許侵害係争とは、これまで米国が先発明制を取っていた為に、その先発明を認める関連の情報開示が遅れ、裁判の時間、経費が莫大になり、中小企業、ベンチャー企業が不利な事もあった。

楽しい時間 74

山本紀久雄

2018年11月30日

神にならなかった鉄舟・・・その四

前号まで検討してきた結果分かったことは、特定の人を神に祀り上げる習俗には、その祭神の性格あるいは祭神化していくプロセスから、二つの類型があることである。

一つは「祟り神」タイプ、もう一つは「顕彰神」タイプで、前者のタイプの典型が菅原道真を祀った北野天満宮であるとする、後者のタイプは徳川家康を祀った「東照宮」であると『神になった人々』（小松和彦著 知恵の森文庫）が述べる。

さらに同書が続けて以下のように記述している。

『加藤玄智の『本邦生祠の研究』（中文館書店）によれば、近世から近代にかけて、死んだ人の「たましい」に留まらず、顕彰したい人がまだ存命であるにもかかわらず、その人の「たましい」を神社を作って「神」に祀り上げることさえ行われていたという。顕彰しようとする人びとの思いが強く、顕彰したい人の死を待てなかった。いや顕彰されるべき人が存命であるうちにそうすることに意味があったということだろうか。加藤玄智は、たとえば、東北地方の庄内藩で起きたいわゆる三方領地替え反対一揆が成功裏に終わった後の嘉永五年（1851）、百姓たちが藩主酒井忠器を「若宮大明神」として祀り上げたことや、大分県に縁のあった明治の政治家・松方

正義公爵を、彼が八十五歳の時に、日田町（現・日田市）亀山公園内にある日隈神社境内に「松方神社」を建立して「神」として祀り上げて顕彰した事例を挙げている。

『郷土を救った人びと―義人を祀る神社―』（神社新報社）や神社本庁の「人臣神社調査」、「本邦生祠の研究」などに列挙されている人臣神社のほとんどは、民衆の手によって建立された民間神社（私祭神社）であった。

この実例を『郷土を救った人びと―義人を祀る神社―』の「松岡神社」（池主霊社）でみてみたい。「神」として祀られたのは鉄舟の弟子松岡萬で、磐田市の松岡神社を訪ねてみた。

JR東海道本線・磐田駅から南へ約3キロ、タクシーで10分くらいである。ドライブに松岡神社へと伝えると妙な顔をして、本部に尋ね、ようやくわかって到着できた。

『静岡県磐田市大原の水神社境内に存命中から土地の人々に救い神として崇められた松岡萬命をお祀りする池主霊社（通称、松岡神社）が鎮座している。

この地大原一帯の水田二百町歩余りは、古くから大池の水を灌漑用水の唯一の水源として生活をたてていた。

ところが、江戸時代末期から水田造成の気運が盛んになるにつれて、大池を干拓、水田化して「儲けしよう」とたくらむ利権屋が相次いでやって来て、農民の生活をおびやかした。旧幕時代だけで前後少なくとも四回あった干拓出願は、その都度必至の陳情でどうやら食い止められ、いくらが大池はせばめられたが最低の水田用水は確保することが出来た。

維新後も勸業殖産という明治政府の方針に従い、この池に

目をつける利権屋が少なくなかった。明治三年には静岡藩より派遣されていた見付郡役所（磐田市見付）の役人、近藤某が、嘆願書を持って干拓取止めを願った総代五人を郡役所に監禁するという事態が起った。途方にくれた土地の人々は、その年の十月、有徳の水利官松岡萬大人を湊村に訪ねて、中央政府への直接の訴願を持ち込んだ。

松岡萬大人は、もと徳川將軍家の旗本で、大政奉還後は徳川慶喜公に従って静岡に落ちついたが、明治政府に請れて水利官となり、湊村では護岸工事や製塩の指導に当たっていた。当時三十二歳の若さであった大人は、農民の訴えを聞くと、直ちに大池に出かけて実情を調査した。そして農民たちの言い分が正しいとわかると必死の努力で中央に建言し、明治四年二月、認可が下るばかりになっていった大池干拓は御沙汰止みとなった。

農民たちの欣喜雀躍したのは言うまでもない。身を賭して危地から救ってくれた松岡大人に対する感謝の気持が盛り上がり、生き神様に祀ろうということになった。そして明治九年八月三十一日、



松岡神社

池主霊社は、祭神天之水分神、国之水分神二座と、松岡萬大人の生霊を合祀して創建された。

松岡大人は、のち警視庁大警部となったが西郷南洲とも親しかったことから、明治十年西南の役を機に官を退き、余生を東京に送り明治二十四年三月十七日五十四歳で没した。

祭典は大人の生前は四月三日に行われていたが、没後は命日の三月十七日に斎行されてきた。現在は大人の誕生日に当たる四月十七日に執り行われている。

実は松岡神社はもう一カ所存在している。『牧之原開拓史考 明治維新と茶業』（大石貞男著）に「松岡神社・池主霊社縁起」が記されている。

《志太郡岡部町（現・藤枝市）の宇津谷峠に近い部落に廻沢という部落がある。周囲は山にかこまれ、みかんと茶と林産物で農業を営む平和な山村であるが、ここの飛龍神社の境内に松岡神社が独立して建てられている》

松岡神社が建立された背景には、当時の土地改革があった。明治7年から始められた林野の官民有地区区分は、林野を①国有林、御料林 ②地主所有林、③共同体所有林の三つに分け、明治14年ころからは入会地の整理が始められ、入会権をめぐる農民騒動などが発生していくなかで、岡部町の土地権問題も発生し、静岡藩庁の水利路程掛兼開墾方頭並であった松岡萬に陳情し、解決されたのである。このように鉄舟の弟子が神に祀られているのに、鉄舟は何故に「神」とならず、鉄舟の銅像も建立されていないのであろうか。次号へ続く。

絹の話 (98)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

知っておきたいシルクの常識

1) 絹の歴史

絹（生糸）は中国でおおよそ五千年くらい前に繭から糸を繰って作られ始めたと言われています。

それ以前の狩猟時代には昆虫食が盛んで、繭の中の蛹を食べるため繭を噛んだ残りで紬糸を作ったのが、人と絹の関わりの始まりではないかと思われます。

製糸技術の日本到来は卑弥呼の時代ではないだろうかと言われています。それ以来中国の魏、蜀、朝鮮の高麗等から大勢の絹技術者移民が来日しています。

大化の改新では貴族に絹の着用と色を定め、庶民に絹を着る事を禁じました。江戸時代になっても奢侈禁止で士族以下では着用出来ませんでした。明治になって日本は富岡製糸場を中心に絹輸出世界一になるのですが、あくまで富国のためで、太平洋戦争が終わるまで贅沢を抑制したので、日本人が日常に絹を着るようになったのは戦後の事なのです。しかし戦後、化学繊維の出現で絹が日常衣料になる事はなかったのです。ところが昨今絹の機能が注目されはじめ、健康用品として絹の下着、食

べる絹（サプリメントなど）、さらには医療（人工骨、皮膚）など多岐に渡って新たな利活用がはじまりました。但し真綿や紬はその限りではなく、日本各地に紬の産地が盛んになりました。真綿は羽織、布団など庶民の生活に広く使われて来ました。

2) 糸づくり用語

繭から生糸をつくる時は「揚げる」「繰る」「挽」を使い、真綿や繭から糸をつくる時は「紬」を使います。

「紡ぐ」は主に短繊維である綿糸や毛糸を糸にする時使われます。絹を短く切断して綿の様に糸を作る事を「絹紡」と言います。

3) 絹糸とはどんな糸、製法、太さ

地球上には絹を作る生物は10万種類以上いるといわれていますが、その中のクワコという桑の葉を食べる虫を家畜化したものが「家蚕」といわれる現在の蚕で、多種類が有りますが、世界中みな同じカイコガ科の昆虫です。他は野蚕の範疇に入られています。

野蚕の利用はそれぞれの国に生息する繭糸昆虫を野外で飼育して糸にしているものです（家畜化エリ蚕を除く）。日本では天蚕が有名で非常に高価です。

糸づくりは繭をお湯で煮て、1本の糸（現在の繭からは約1500m）に解舒したものを同時に10個前後引き揚げたものが生糸です。この作業は製糸とよばれます。

この糸は繭を固めていたセリシンというニカワ質の蛋白質が沢山付着していますので、麻のようにゴワゴワしています。これを除去してしなやかにするのが精練です。

最後に糸に撚りをつけるのが撚糸で、精練と撚糸で硬柔、糸の性質が決まり、絹は柔らかいばかりでは有りません。

糸の太さはデニールという単位で計られ、現在の繭は大型化して3デニール前後です。(9km/g1デニール) 数値が大きくなれば糸は太くなり、絹紡糸や木綿、ウールの太さは番手で表され、数値が上がれば細くなります。

4) 絹の機能性

絹を着ると暖かく、サラットしてべつつかないなどの他の繊維にはない感触が有ります。

繭は蛹を守るための機能性カプセルです。

保放湿性、保放湿性(絹はフィブロインというアミノ

酸の結晶で、その結晶構造に秘密が有ります)

防紫外線性(お握り型の糸の形による反射と吸収された光の短波長を長波長へ変換しています)

抗菌性、防臭性(雑菌の繁殖を防ぐが殺菌はしません)

吸臭性(臭いを繊維の中にエンドレスに吸収します)

緩衝性(糸の弾力性と柔晶部分が衝撃を吸収します)

5) よく話題にのぼる絹

羽二重…縦緯撚りをかけない生糸で織りあげた後、精練

したもので(後練り)、非常に柔らかくフワフワです。この技法の物に縮緬、クレープなどが有ります。

多くの絹織物は先練りです。

富士絹…生糸をとった残糸を細断して絹紡糸として織られ、空気が沢山含まれているので柔らかいのです。

6) 絹ずれ、絹鳴り

絹ずれは絹の「布と布」の表面がすれ合う音で、すれ方で音が異なります。

絹鳴りは精練剤の残液の皮膜ですべすべになった糸で織られた「糸と糸」の表面がこすれて出る音で、片栗粉を握った様な音です。絹鳴りする絹織物は少ないです。

7) 絹と洗濯

水の適温は20℃～30℃で、中世染剤が良いです。絹は摩擦に弱いのでみ洗いは避けて下さい。

家蚕は日陰干し(黄変防止)、アイロンは蒸気を出し、アイロンを浮かせず中温以上でかけて下さい。

8) 絹の食害

絹はカツオブシムシに食われます。繭が茶色の野蚕絹に食害はありません。

9) 絹とアレルギー

絹は親和性に富んだ蛋白質繊維で、獣毛の様なアレルギーを起こす事は殆ど有りません。

漢詩研修 (二十七)

千代田岳精会 平井茂行

立^{たて}山^{やま}を望^{のぞ}む

国^{くに}分^が青^{せい}彦^{ひこ}

夢^{ゆめ}に名^め山^{さん}を見^みるこ^こと四^し十^{じゅう}年^{ねん}

暮^{くれ}に山^{さん}麓^{ろく}に投^{とう}ずれば只^{ただ}雲^{うん}煙^{えん}

天^{てん}明^{めい}日^ひ出^いでて驚^{おどろ}き相^あ揖^{いう}すれば

玉^{ぎよく}立^{りつ}せる群^{ぐん}仙^{せん}我^わが前^{まえ}に在^あり

夢^{ゆめ}に名^{めい}山^{さん}を見^みるこ^こと四^し十^{じゅう}年^{ねん}
暮^{くれ}に山^{さん}麓^{ろく}に投^{とう}ずれば只^{ただ}雲^{うん}煙^{えん}
天^{てん}明^{めい}日^ひ出^いでて驚^{おどろ}き相^あ揖^{いう}すれば
玉^{ぎよく}立^{りつ}せる群^{ぐん}仙^{せん}我^わが前^{まえ}に在^あり

夢^{ゆめ}見^み名^{めい}山^{さん}四^し十^{じゅう}年^{ねん}
暮^{くれ}投^{とう}山^{さん}麓^{ろく}只^{ただ}雲^{うん}煙^{えん}
天^{てん}明^{めい}日^ひ出^い驚^{おどろ}相^あ揖^{いう}
玉^{ぎよく}立^{りつ}群^{ぐん}仙^{せん}在^あ我^わ前^{まえ}

(下平一先韻)

【作者】

国分青厓（二八五七―一九四四）明治・大正・昭和時代の漢詩人。名は高胤、字は子美。青厓（崖）はその号。別に太白山人と号した。仙台の人。青厓は仙台青葉山の崖、太白山人は仙台太白山の意にとった。年少のころ、藩学養賢堂教授国分松嶼に漢学を、落合直亮に国学を学んだ。

十七年、学習院長谷干城の下で生徒監をつとめ、その後高知に赴き、『高知新聞』の記者となった。二十二年に『日本新聞』が創刊されると、その記者に転じ、時事批判の詩『評林』の筆を執った。後『日本新聞』が新旧両派に分裂して、旧派が雑誌『日本人』と合併して『日本及び日本人』を発刊するに及び、同誌にも「評林」の掲載を続けた。これら「評林」の詩を集めたのが『詩薰狐』である。

大正十二年に大東文化学院が創設されると、教授として招かれて作詩の指導にあたった。また雅文会その他の詩社の主盟となり、雑誌『昭和詩文』を主宰し、昭和十二年六月には芸術院会員に列した。

青厓はまことに天性の詩人であった。縦横の才をもって意の会うところをことごとく詠じ、その詩の数は、生涯を通じて四、五万に達した。

【鑑賞】

山水を好んだ作者は、およそ天下の奇勝と名のつくものはほとんど訪ねた。特に立山は日本三霊山の一つである。四十年来夢想して果たさなかったのを、このとき果たしたのである。「驚相揖」は、その初対面の感激を如実に伝えている。雪に輝く連峰をたおやかな群仙に見立てたのは、奇想というよりは実感であり、まことに迫真の妙がある。

（出典）「吟剣詩舞道漢詩集（日本吟剣詩舞振興会）」他

松尾芭蕉が追った先人

〓 西行法師（元永元年（一一一八）〓 文治六年（一一九〇）二月十六日

中屋保之

芭蕉と西行の間の時間は約五百二十年の開きがある。四十を前に日本橋から深川へ居を移した芭蕉は、仏頂和尚について禅を学び、同時に莊子・杜甫などの漢詩・漢文に触れ、更には西行法師とその師である能因法師を知るに及び彼らに傾倒していったのであろうか。

この頃著した作句五箇条には、

- 一、一句、前句に全体はまる事、古風・中興共可申哉。（古風〓貞門・中興〓談林）
- 一、俗語の遣いやう風流なくて、又古風にまざれ候事。
- 一、一句細工に仕立て候事、不用候事。
- 一、古人の名ヲ取出て何何の白雲などと云い捨る事、第一古風にて候事。
- 一、文字あまり、三四字、五七字あまり候而（て）も、句のひびき能候へばよろしく、一字にても口にたまり候ヲ御吟味可有候事。

とあり、西行の作歌表現法の芭蕉への影響を覗える。そして、漂泊の歌人西行に倣い「野ざらし紀行」を皮切りに旅立つことになる。

（芭蕉三八歳、高山伝右衛門宛ての手紙より）

「野ざらし紀行」

腰間に寸鐵をおびず。襟に一囊をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有。俗に、て髪なし。我僧にあらずといへども、浮屠の属にたぐへて、神前に入事をゆるさず。暮て外宮に詣侍りけるに、一ノ（の）華表（とりい）の陰ほのくらく、御燈處、に見えて、また上もなき峯の松風、身にしむ計、ふかき心を起して、

みそか月なし千とせの杉を抱あらし

西行の歌「深く入りて神路の奥をたづぬればまた上もなき峰の松風」（千載和歌集）

西行谷の麓に流あり。をんなどもの芋をあらふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町計わけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかに有て、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。彼とくどくの清水は昔にかはらずとみえて、今もとくどくと雫落ける。

露とくときく心みに浮世すゝがばや

若これ扶桑に伯夷あらば、必ず口をす、がん。もし是杵（許）由に告ば耳をあらはむ。

西行の歌「とくときと落つる岩間の苔清水くみほすほどもなきすまひかな」

「爰の小文」

百骸九竅（ひやくがいきゅうけい）の中に物有り、かりに名付けて風羅坊といふ。誠にうすものの風に破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。

ある時は倦で放擲せん事を思ひ、ある時は進んで人に勝たむ事を誇り、是非胸中にたたこふうて是が為に身安からず。暫く身を立てむ事を願へども、これが為にさへられ、暫く学んで愚を曉（さと）らん事を思へども、是が為に破られ、つひに無能無芸にして只此の一筋に繋る。

西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の絵に於ける、利休が茶における其の貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。像（かたち）花にあらずる時は夷狄にひとし。心花にあらずる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化に帰れとなり。神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我が名よばれん初しぐれ

「奥の細道」

西行が出家後に初めて陸奥を訪れたのは、能因法師の影響があったといわれている。芭蕉が「奥の細道」に向かった元禄二年（一六八九）は、西行没後五百年忌にあたり、また、同じ道筋を辿ったことからその影響は多分に大きなものだったと思われる。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。（「白河の関」の章）

都をば霞とともにたちしかど

秋風ぞ吹く白河の関（能因法師後拾遺和歌集）

先能因嶋に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、「花の上こぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念をのこす。

象潟の桜は波に埋れて

花の上漕ぐ海士の釣り舟（西行法師）

芭蕉の旅の多くは、こうした先人たちの足跡を辿ることにより新たな境地へと達していったのであろうか。

芭蕉辞世の句

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

清滝や波に散り込む青松葉

西行辞世の歌

願はくは 花の下にて 春死なむ そのきさらぎの 望月のころ

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2018年12月3日

身体を温める

朝の空気が澄んでいて
深呼吸が本当に気持ちの良い朝になりましたね
寒くなってくる

手足が冷えてきます

そうすると

身体が芯から冷えてくるように感じます

特に女性を感じやすいかも知れません

芯から冷えてしまうと

中々温まらないですよ

寒いからと言って

睡眠時

靴下は絶対にはかかないでください(笑)

そこで登場するのが

ゆたぼん なんです

人間の体温を決めるのは腸なんです
ですから末端の手足ではなく

中心の腸を温めると手足も暖かくなるんです

◎湯船につかる

◎腹巻を巻く

◎睡眠時に+ゆたぼん

身体の基本体温が上がります

もちろん

基礎体温自体をあげるのは

数年かかりますが

下げ続けると

免疫力も落ちますし

便秘の問題も出やすくなります

また3つですが(笑)

身体を温めて行きましょう

2018年12月5日

まさかの冬の寒暖差

師走にきてのこの暖かさ
ビックリしますよね(笑)
そして

中々スカッと晴れず雨や曇りが多いです

寒暖差が夏だけではなく

冬にまで来るなんて想像できませんでしたよね

お陰でインフルエンザの流行が

例年通りになりそうで安心していません

ただ夏の寒暖差の疲れが

やっと落ち着いてきたと思ったら

冬の寒暖差

これは自律神経に負担がかかります

睡眠の問題

情緒不安定

内臓の問題

ギックリ系
などなど

季節の変わり目の不調の様な

問題も出やすくなります

引き続き身体を冷やさず

睡眠を大切にしていきましょう

「ゆたぼん」とは、

電子レンジで温度調節ができ

何度も使用可能。

「ゆたんぼ」現代版です。

「歴代天皇御製歌」(九十六)

貫名海屋資料館

「昭和天皇」⑥

層雲峡より高原温泉に向ふ

そびえ立つ大雪山の谷かげに雪はのこれり秋たつらしも

稚内公園にて（樺太の眞岡郵便局の九人の乙女の殉職の碑）

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

豊岡市コウノトリケージにて

この秋の最中^{もなか}に見たるこうのとり雛をもつらむその日思ほゆ

昭和四十四年・一九六九年・六十九歳

「天草初冬のひどろ蟲類」を御出版

星

なりひびく雷雨のやみて彗星のかがやきたりき春の夜の空

あらたまの年をむかへて人々のこゑにぎはしきにひ宮の庭

長崎県の国民体育大会

長崎の縣あがたの山と海の邊に若人きそふ秋深みつつ

ゆく秋の平戸の島にわたりきて若人たちの角すまひ力見にけり

久しくも五島を觀んと思ひゐしがつひにけふわたる波光てる灘を

富山・繩ヶ池にて

水きよき池のほとりにわがゆめのかなひたるかもみづ(水芭蕉)ばしようさく

靖國神社百年祭

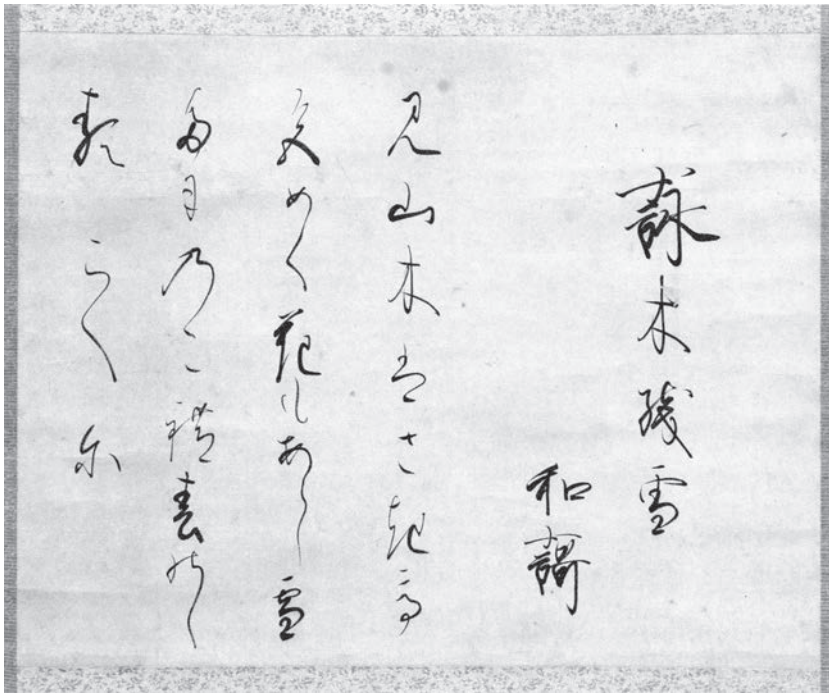
國のためのちささげし人々をまつれる宮はももとせへたり

昭和四十五年・一九七〇年・七十歳

大阪で万国博開催。三島由紀夫自決

花

白笹山のすその沼原黄の色につこうきすげむれさきにほふ



靈元天皇宸翰若懷紙

靈元天皇筆・江戸時代・延宝三年（一六七五）

「釈文」

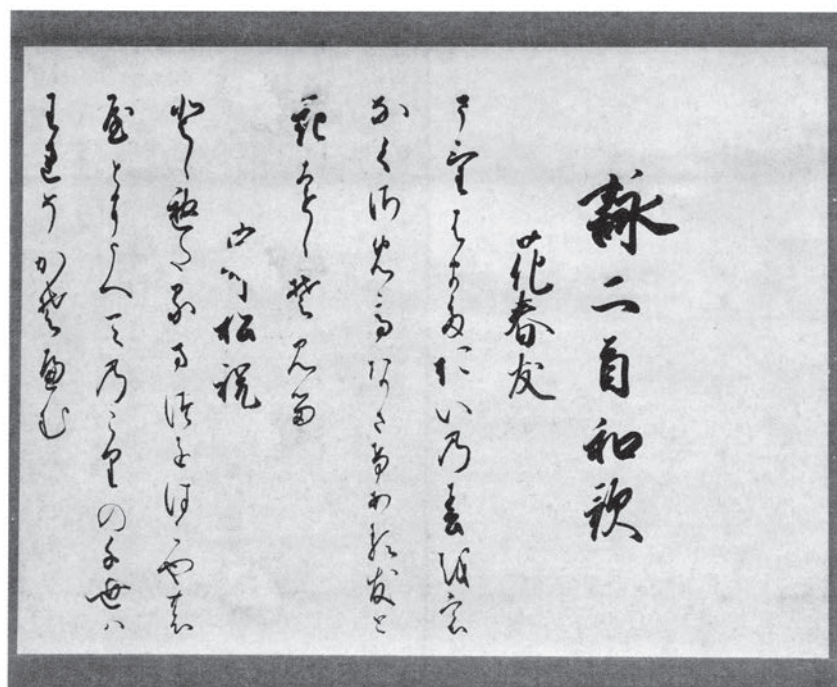
詠木残雪 和歌

み山木は さきて

色めく花もあらし雪

たにのこれ 春のし

るしに



靈元天皇宸翰若懷紙

靈元天皇筆・江戸時代・十八世紀

「釈文」

詠二首和歌

花春友

さけばまた おいの春をも

なぐさめて なさけある友と

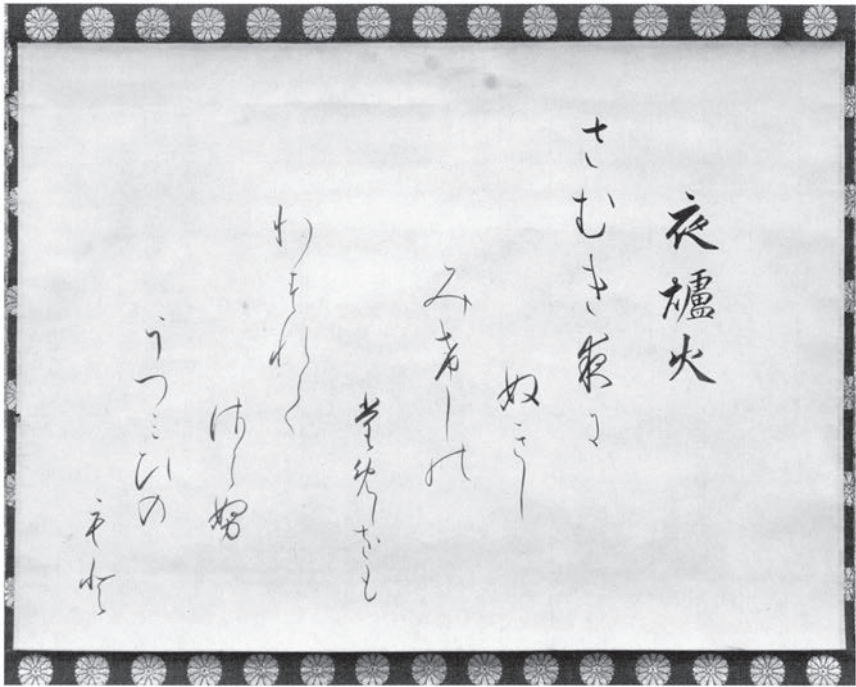
花をしぞ見る

寄松祝

としへたる まつをはこやの

やどにうへて のこりの千世は

われぞかぞへむ



中御門天皇宸翰若懷紙

中御門天皇筆・江戸時代・十八世紀・仁和寺

「釈文」

夜爐火

さむき夜に

ぬぎし

みけしの

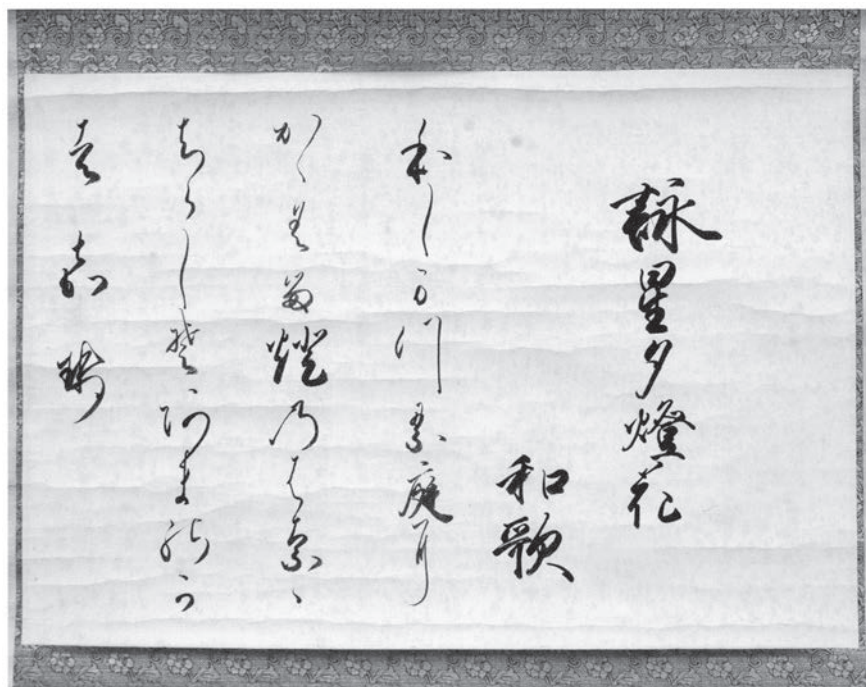
ためしをも

わすれて

さらぬ

うつみひの

もと



桃園天皇宸翰若懷紙

桃園天皇筆・江戸時代・

宝暦十年・一七六〇・仁和寺

「釈文」

詠星夕燈花 和歌

ほしまつる庭に
かゝくる燈のはな、
ちらしぞ あまのか
はかぜ

(参考文献・東京国立博物館・真言宗御堂派総本山仁和寺)

御津磯夫短歌鑑賞 13

「月虹」 鮫島 満

左右^{とかく}のはからひ止めて在^ありのままはからひなきをはからひとする
『かうしんばら』昭和五十五年

パスカルは『パンセ』の中で「人間は考える葦」だと述べ、人間の思考の偉大さを説いているが、「考える」ゆえに厄介な存在なのだとどこかに匂わせているのだろうか。仏教は悟りの境地を妨害する心の作用を煩惱と言っている。多くの人は社会の中でこうありたいと考える時、さまざまな場面において〈煩惱〉に悩まされる。それは、我執、策略、陰謀、悪しき忖度など、「百八」の網となって張り巡らされているらしい。これらの煩惱を身から去ろうとする時にさえ何らかの「はからひ」が生まれるであろう。厳しい努力によってそれらから自由になったとしても、他人はその過程に「はからひ」を見ているかもしれない。

右の歌を読みながらそんなことを思った。作者は写生を重んじ具体を大切に詠む歌人であるが、この歌がやや観念に傾いている分、私は右のような思いに誘われたようである。しかも私は「はからひ」を負の面の働きとして読んでしまった。

作者の師である斎藤茂吉に、

よわよわと幽かなりともはからひの濁りあらずなわれの世^{よすぎ}過に
（『つゆじも』大正十年）

がある。磯夫がこの歌を意識したか否かは別として、茂吉の歌は「はからひの濁り」となっているから「はからひ」に「濁り」生じることを前提にしているようである。茂吉はいかに微細な程度であろうと自分の生涯に「はからひの濁り」が生じないことを祈っているのである。

磯夫にしても茂吉にしても医家としての人間観察を深めた人であり、右のような歌を詠むことによって自己の生を戒めることがあったのである。

ついでながら、右の歌を読むとき言葉遊びがあると思つてはならない。

「氷魚」のことから (216) 岡本八千代

西山にうすれて残る夕映えはここには遠き光りなりけり 岡 麓

この歌を読んでいたら私は、

仲良しの友とも遠く遠くなり互いに独りの生活となりつづ

という歌ができた。そのことを久しぶりに学生時代の友に電話したら、しばらくおいて

「庵」もりの友の電話や白木樫

と、彼女作の俳句が返ってきた。彼女と私、長い間の学生時代から続いている友だちの間柄である。互いにしばらく文通が途絶えていたので今こそ驚き合ったのであった。

然う斯うしているうちに、今回もDonald Keene 著、新井潤美訳（中央公論社）の本よりに従って、他の歌人たちの歌も拾ってみた。

白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよぶ 若山牧水

The white seagull—

Is it not saddening

It should hover undyed

By the blue of the sky

Or the blue of the sky?

この歌の意味にはいろいろ議論があったとされていたらしい。それは、「かなしからずや」ということが、鳥に向

けられた問いなのか、鳥に対する牧水の共感を表わしているものかと。私は、牧水自身の哀しさが歌われていると感じとっている。先月号に白水涵子さんのことを私は歌ったが、実は白水さんの御父母様は牧水が函館へ来た時、いつも自分の家に泊めてあげられたとか、白水さんから聞かされていた。わが友、白水さんは文学一家だったのかと思っていた。白水さんは今思うと卒業して郷里へ帰られてより、高校の先生にもなり、また自費で「白雪」という文芸誌を出された。私にも原稿を書かせて下さり、歌や随筆などを載せて下さったこともあった。また、白水さんは「氷点」の作家、三浦綾子との交流もあり、活動的でもあった。私は今も「白雪」の創刊など大事にとつてある。

だいぶ脱線したみたい。慌てて今一首。

東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる

On the white sand of the shore of a small island
in the Eastern sea.

My face wet with tears.

I play with a crab.

この歌、誰もが知っている歌。男でありながら、非常に口マンチックに思える。いや男だから故に感動の現わしかたがあのままといいか、大胆というか、弱虫というか、私にはわからない。いずれにしてもその人その人の抒情性というものが表現されてゆくのだから。

子規の写生論も茂吉も「短歌は本質的に抒情であり、感情移入である」としているのか。

編集室だより【二〇一八年十二月】

今泉 由利

○芭蕉の座右の銘は、「人の短をいう事なかれ、己が長をとく事なかれ」という。「物いへば唇寒し秋の風 芭蕉」を偲ぶ。

○世界自然遺産の白神山地より採取された天然酵母と、北海道産小麦、国産バターと卵黄のみを使用し、イタリアのレシピそのままの「パネトーネ・ナターレ」。近くのパン屋さんで焼きあがる。今まで経験したこの「クリスマスのパン」との思い出が、次次次次よみがえってきて、良い人生だったことを確かめつつ、日本の本場に美味しいパネトーネをいただきながら、良い人生を続けている。

○「偶成」朱熹作。気がつかなかったのだけれど昔々「少年老い易く学なり難し…」とか「不識庵機山を撃つの図に題す」頼山陽作。「鞭声肅肅夜河を過る…」いまになって自身が吟じているのが不思議。日本に帰ってきて、偶然に…こんなことになってきて…面白くなってしまう。

○ニューヨークの子達が、猫・シャーロックを飼いはじめた。毎日、インスタで猫の様子を伝えてくる。スマートフォンので見ているだけなのに、可愛いくて可愛いくてたまらない。こんなに心を占めるものがあることは必要。

○日本に帰つてすぐ知り合った、ボーグで編物の先生をしておられる藤崎陽子さんの「テキスタイルアート」・「フリーレース」の恒例の展覧会を見せていただく。

素材も手法もすべて独自の発想、独自の作業。あつと驚く別世界のような衣装は、ご自身が着ておられる。こんなスタイル大好きです。

会場の「小津ギャラリー」もまた素敵でした。

○「絹の話」のテレビの勉強会。

「絹の話」のアトリエ・テレビにて、草木染の勉強。学生時代は、二代目の山崎青樹先生でした。今日は、三代目の山崎和樹先生に教わりました。自然の草木の色を、草木染、糸染、浸し染…布へ和紙へと移す。なんと素晴らしい世界。千数百年を経て、鮮やかに色を残す。今の私の心にも、しつかり染みる。

○どこを旅しても探しても、幸せはみつかりません。

幸せはいつも自分の心の中にあります。

心で思うことは実現します。

正しい心の持ち主には

幸運がついてくるものです。

BY ブッダ

野菜・まんだら (11) ハート オブ パーム・パルミート HEART OF PALM



- 椰子の芽
- コスタリカ、南米、東南アジア、など。
- ブラジルでの見聞、ココヤシやアサイヤシを栽培する椰子畑に行ったことがある。
- 適当に育ったヤシの成長点を切り取ってしまうのだから、ココナツの実がなることはな



く、一本の椰子の木の終り。

- 切り取られた1 mほどの新芽を丸ごと湯がいたり、焼いたり……皮付きのたけのこのような長いものがテーブルに運ばれ、切り開いて成長点であるハート部分を食する。
- コレステロールはゼロ。繊維質が多く、ミネラル、鉄分、ポリフェノール、なによりも巨大に育つ椰子の芽の成長点をいただくエネルギーに、おどろきながら詫びながら。命を思う、美味しさをもっている。
- アルゼンチンでは、マヨネーズとケチャップを調合し、薄いピンクのオーロラソースでいただくことが多い。塩の砂漠の塩をほんの少し、醤油一滴でも美味。

今泉由利





「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- TEL (〇三) 五九二四・二〇六五
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇会員・今まで会員の方。希望される方。
- ◇会費制 廃止。
- ◇新しく購読を希望される方 一ケ年五千円。
- ◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九
- ◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
- ◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。